

しつけが礼儀道徳

二月の生論大賞と福井雄三の「歴史の真実」が火種になって、ずっと戦争について述べてきたが、5Sが中途であった。5Sの五番目はしつけ。生産工場だけでなくしつけは全社員、全人間の必修科目である。だが工場だけでなくしつけは全社員、全人間の必修科目である。

精神強化に必要な礼儀と道徳

「親のしつけがなっていない」という言葉から思い浮かぶのは、言動が粗暴で自分勝手に反感を与える人であろう。「こんなやつとはつき合いたくない」と思う人であろう。

しつけは裁縫のしつけ糸から来ている。着物の形を整えるため、縫い目を導くためしつけ糸でざっと縫う。本縫いが完了すればしつけ糸は引き抜かれる。切断された布地を着物に仕立てるうえでしつけを疎かにすれば半端物ができる。人も同じ。

しつけとは家庭で親が子に身につけさせる礼儀作法である。礼儀作法とは社会の秩序を維持するために長い年月をかけて作り上げてきた慣習である。簡単に言えば人が一人前の人として認められるためにとる言動である。

しつけは返事、挨拶、言葉遣い、態度(挙措動作)などの礼儀作法だけでなく、「嘘をつくな」「卑怯なことをするな」「弱いものいじめをするな」「盗むな」「我慢しろ」「上に従え」といった道徳教育に及んでいる。

道徳は教育勅語をはじめ、会津等、何でも自由の個人主義である。家庭も学校も社会も人はみな平等。何でも自由の個人主義である。家庭も学校も社会も人はみな平等。何でも自由の個人主義である。

しつけは上が下にする。上下関係がなければしつけられない。母親が「お父さんに対して何ですか、その口のきき方は！」と叱って子の言動を直す。形を教え身につける(この形を身につける本人の努力を「修身」と言った。礼儀道徳がすたれた現在、修身は死語になっていく)。

家庭で父と母と子が平等ならお友だちである。挨拶も言葉遣いもなれなければならない。父母が子に合わせて友だち言葉で話す。

学校の先生は「自分は師ではない。偉くはない。私は労働者、月給取りのサラリーマン」と言い、それにふさわしい態度行動をとる。

藤原正彦が週刊新潮の「管見妄語」でこう言っている。「大森貝塚を発見したアメリカの動物学者モリスは、どんな外国人でも数ヶ月間も日本に住めば、『自分の国では精神的重荷となつた』という道徳や品性を、日本人が生まれながら持っていること」に気が付くとまで言った。モリスはか

りか十六世紀以降訪日した多くの外国人が日本人の類いまれな道徳、礼節、品性を賞讃してきた。来日した欧米人が記録に残しているのはこれは事実である。しかし日本人は生まれながらに道徳を備えているという考えには同意できない。

礼儀と道徳は赤ん坊は身につけてい

勉、思いやりなどの精神態度が身につけていた。幸之助だけでなく日本の少年はみな身につけていた。子に対する親のしつけは日本の伝統であり美風であった。外国人が「生まれながら」と錯覚するほど自然に、海岸の裸の漁師の子にいたるまで行き渡っていた。今はどうか。

高卒大卒で就職した人。一人前に仕事ができるようになるまで早く三年、普通は五年かかる。家庭と学校でしつけられずに育つたので、上司、先輩、お客様に対する礼儀ができていない。社会人として組織人としての道徳が身につけていない。

会社は仕事の技術を教える前に、新入社員にしつけ教育から行わなければならない。そのため一人前になるまで時間がかかる。しつけという日本の伝統美風は過去のものになった。

これではいけないと中央教育審議会が政府に「道徳の検定教科書を作成し、特別の教科に格上げすること」を答申した。

道徳の根幹は人類愛である。これをもう少し身近にすれば国家に對する忠誠心である。

親子、師弟の間に上下関係がなければしつけはできないと言ったが、国民に愛国心がなければ「道徳」は身につかない。

愛国心は家族愛、愛社精神(郷土愛)の延長線上にある。これらは密接につながっている。自分の子を愛する親は厳しくしつける。社会人になって人から認められ信頼される人になってほしいからである。親の献身に恩を感じた子は親に孝行する人になる。

家族愛のある家の人は会社のために尽くす。生活の糧を提供し人間性を高める場である会社の存続と繁栄を心から願うからである。人も会社も国を離れて存在できない。国土の恩恵を受け、法に守

これを受けて文部科学省は「学習指導要領を改定し平成三十年からの実施を目指す」と発表した。一歩前進である。本当に？

出版社が驚異的な部数の伸びを見て「おぼけ」と言った「上司が鬼とならねば部下は動かさず」は平成十二年発行である。その中に「学校教育は歴史教科の改訂で道徳、躰の重視など転換期を迎えているが」という文がある。十四年前すでに道徳の荒廃が叫ばれ、改革が進められていた。

小中学校に道徳の授業が設置されたのはこの頃である。まじめな先生は「命の大切さ」を教えるため、うさぎやにわとりを飼い、反抗的な先生は運動会の準備などに時間を使った。

事態は変わっていない。問題は先生と教科書である。先生が生徒との上下関係を復活しなければ道徳の授業は成立しないし、教科書作成者が自由平等の個人主義者な偏向教科書ができる。またもや、仏作って魂入れず”に終る。

「道徳教科は価値観を押しつけ、子供がのびのびと育たなくなる」と言うリベラル知識人や、現在国を作っている歴史や社会の教科書を作っている先生方に、道徳の教科書を作らせなさいくれ!

家族愛↓愛社精神↓愛国心

道徳の教科書を作る人も同様。国に対する誇りと祖先に対する感謝の心を持つ人でなければ、子を導く優れた教科書は作れない。文科省にお願いする。

道徳の教科書を作る人も同様。国に対する誇りと祖先に対する感謝の心を持つ人でなければ、子を導く優れた教科書は作れない。文科省にお願いする。